

## 人権保育専門講座3

造形活動を通して自尊感情を高める

# テーマ 実践から学ぶ子どもの表現

- 0歳からの実践を通して -

畿央大学 永渕 泰一郎さん

人権保育専門講座③は、「造形活動を通して自尊感情を高める」をテーマに、畿央大学教育学部 現代教育学科准教授の永渕 泰一郎さんからご講演いただきました。永渕さんからは、子どもの表現を引き出す保育のあり方について、絵画などの造形活動にまつわる具体例をもとにお話しいただき、子どもを尊重するための保育者としての姿勢を振り返る機会となりました。



### 1. 保育のなかの表現って何だろう？

まず、「保育のなかの表現」について考えてみたいと思います。「保育のなかの表現にはどんなものがありますか？」と保育士さんに聞くと、「歌うこと」「作ること」「劇遊び」「楽器を鳴らす」「砂場での活動」「身体表現」「遊び」など、様々な活動が出されます。当然、これらの活動も「表現」です。しかし、同じことを学生に質問すると、もっとフレッシュな感覚で答えが返ってきます。例えば、「笑うこと」「泣くこと」がそうです。このように私たちは、「表現」と聞くと、ついつい活動をイメージしがちです。しかし、子どもたちは「その場にいること」で、すでに「表現」をしているのです。また、「黙っていること」「聞いていること」も「表現」です。子どもたちが「黙っている」姿を見て、「〇〇ちゃんは何もしていない。」ととらえるのではなく、「〇〇ちゃんは自分と向き合っている。」ととらえることで、子どもへの見方は大きく異なってきます。

子どもたちの表情や態度、子どもたち自身が考える遊び方なども「表現」ととらえると、様々な子どもたちの姿がみえてきます。そして、たとえ赤ちゃんでは話ができなくても、障がいがあっても、存在そのものを愛おしくみていくことで、すべてが人権保育につながっていきます。



## 2. 子どもの表現を引き出す保育者の役割

子どもの表現世界はおとなの感覚とは違います。そのため、まず私たちは子どもの世界を知り、子どもから学ぶ姿勢を大切にしなければいけません。子どもと世界観をシェアさせてもらえるのは、とても幸せなことですね。おとなの感覚ではガラクタと思っても、子どもにとっては宝物ということがあります。子どもの絵やつくったものの中には子どもたちの「心」（内面性）がたくさん表現されているととらえ、一人ひとりの子どもの思いを大切にしていくな必要があります。

では、幼児の世界に共感しながら成長・発達にあわせて、一人ひとりの子どもの思いを大切にすると、どのような保育をいうのでしょうか。

ここに子どもが描いた一枚の絵があります。この絵をみて、どんな子どもがこの絵を描いたのかを想像してください。あるデンマークの子どもが描いた絵で国際的なコンクールで入賞した作品です。赤一色で描かれている人物の絵です。私は、とある研修会でこの絵を受講者にみせました。そして「男の子が描いたか？女の子が描いたか？」と尋ねてみたのですが、



女の子と答える人が多くいました。理由を聞いてみると、「赤い絵の具を使っているから」ということでした。また、「何歳の子が描いたか？」と尋ねてみると、4歳ぐらい、という回答に集中しました。聞いてみると、「人物の目がグリグリとして目玉がないから」「手がおなか付近から出ているから」という理由でした。私が「この絵は実は国際コンクールの入賞作品で、絵を描いた子は、8歳の男の子なんですよ」と言うと驚く人が多かったですね。その

デンマークの子どもの作品は、赤一色で描いているのもかわからず、見事なグラデーションで色を塗り分けています。色味を意識して自分で調整できる年齢であることがわかります。子どもは、髪は何色、肌は何色…といった決めつけにとらわれない自由な発想で表現をしているのです。

「おとなは、子どもに『カタチ』を求めすぎているなあ」と私は感じています。子どもの「表現」の可能性を押しつぶして、おとなの決めつけにしばって「カタチ」づくられた作品を描かせているようにみえます。そんなことをしていたら、子どもは「自分の絵」を失います。また、「カタチ」に縛られて、完璧な人のフォームを子どもたちに押しつけていくことは、子どもたちに「人の姿はこうでなければならない」と刷りこむことになります。これでは、人権を大切に保育とは言えないですね。



## 3. 子どもの絵をみることから、自分たちの保育を問い直してみよう

自分たちの保育をふり返ってみましょう。子どもに「カタチ」を求めすぎているのでしょうか。また、子どもが絵を描くと、その絵について説明させようとしていないのでしょうか。子どもにテーマを与えておきながら、「何描いたん？」と聞くことは、子どもに「先生は私

が描いた絵が何かわからへんのや」と感じさせ、自尊感情を傷つけることにつながります。自尊感情を傷つけるようなことを子どもに聞き続けると、子どもは自分がしゃべりたいことではなく、保育者のしゃべってほしいことを読みとってしゃべろうとします。逆に、聞くことをやめると、自分から話してくる子とそうでない子の違いがみえてきます。話してくる子は保育者との信頼関係ができている子、話してこない子は、まだ信頼関係ができていない子です。むやみに「聞くこと」よりも、子どもとの信頼関係を築くことが大切です。

子どもが描いた絵の色を見て、心理が気になるのもおとなの悪い癖です。たとえば、黒一色で塗ってきた子のことを心配しがちですよね。でも、子どもは他の色に移り気することなく、一心不乱に塗っているだけかもしれません。色の心理テストを簡単に子どもに当てはめてしまうのではなく、勢いよく描いたことを認めてあげることが大事だと思います。色を変えて塗る子がいたら、その子は今、色に興味があるのだととらえればいいんです。

それから、子どもが描いた絵に空白があると、「ここ塗ってないよ」と言って埋めさせようとしがちですが、実は日本文化である屏風には、想像を広げさせるために空白の部分がたくさんあります。ですが、おとなは西洋文化の特徴である「空白を埋める」という教育をうけてきているので、「空白を埋めること」を子どもたちにも押しつけてしまいます。すると、子どもたちは空白部分に丸をたくさん描いたり、ハートを描いたりしはじめます。これは、空白を埋めさせる指導をしてきた保育者に対して、「先生ほめて」「先生認めてくれる？」という子どもたちからのサインなのです。子どもの発するサインとしては、とても悲しいものと言えますね。

大切なことは、子どもの描いた絵をみて「うまく描けていない」ととらえるのではなく、1年前と比較して発達していることを冷静に認めること、発達の連続性をきちんととらえて子どもに無理に描かせないことだと思います。



#### 4. 子どもがそのままの表現を出せるようになるためには？

子どもがそのままの表現（表出）を出せるようになることは、とても重要なことです。そのために、「絵の具コーナー」など、子どもが描きたいときに描ける環境を整えることが大切です。描く子もいれば、描かない子もいる、これが自然な状態です。

また、子どもが「安定」していないと表現は出ません。たとえば、3歳で入園してきたばかりの子に「鯉のぼりをつくりましょう」と言っても、まだ園生活に慣れず安定していない子が表現できるはずがありません。入園したばかりの時期は、行事より子どもの安定を優先させるべきです。でも、5歳児だと意味が変わります。5歳児は一番年上で、「何でもやってやる」という意気込みをもっている場合も多く、発達の面でみても鯉のぼりをつくる意味があります。このように、子どもがそのままの表現が出せるようになるためには、「安定」

が大きなキーワードになってきます。

保育者との信頼関係も重要です。「今日、先生と遊んだ人？」と聞いてみると、実は先生と個人的に遊びたいと思っている子がたくさんいることに気がつきます。一斉保育が間違っているというわけではありません。ただ、一斉保育のなかで子どもたちの感じ方は、一人ひとり違うということを忘れずにいる必要があります。子どもたちは、一緒に遊ぶことで心を見せてくれるようになります。そして、信頼関係が生まれてくると、子どもは絵で表現してくれるようになります。

保育者の受け入れ方も重要です。子どもに質問するのではなく、子どもから表現を引き出すような言葉がけをしましょう。絵を描かせるのは、自尊感情を育てるためであることを忘れてはいけません。

## 5. 子どもを信じること ～子どもは何でも自分で考えられる～

イタリアのレッジョエミアリアにある保育の事例です。これは、1980年頃に出た写真です。生後10ヶ月の子が、本を読みながら先生とコミュニケーションをとっています。この子は、本に載っていた時計の写真を指さしながら先生の方を見えています。この写真を見た世界中の人は、「生後10ヶ月の子が、本を読んでいる！」と驚きました。一体、先生はどのようにして10ヶ月の子に本を読ませたのでしょうか？この先生は、本に載っている時計の写真を見ながら、「それが好きなの？」「先生は、こっちが好きよ」と語りかけました。そして、自分のつけていた腕時計を子どもに触れさせ、本物の時計の音を聞かせてあげたんです。この子は、本物の時計の音を聞きながら考えました。そして、本の時計も音が鳴っているのではないかと仮説を立て、本に耳をあててみました。きっと、「こっちもコチコチ？」と頭のなかで考えていたに違いありません。子どもは、「もしかしたら・・・」と想像をめぐらせたことを実際にやってみようとしています。子どもは、仮説をたててそれを実証しながら、いろいろなことを感じ、考えているのです。子どもに自分で考えさせることで、子どもの可能性は広がっていくのです。

## 6. 概念について

### ○概念に縛られないために

おとなの決めつけについて、もう少し考えてみましょう。「りんごの絵を描いてみましょう」と言われたら、みなさんどんなリンゴを描きますか？「自由に描いて」といくら言っても、なぜかおとなが描くリンゴの絵というのは、どこか似通ってしまうんですね。リンゴの形とか、光沢とか、葉っぱを付けてしまうところまで、不思議と似るのです。「魚を描いてみましょう」「家を描いてみましょう」と言われても、同じように、似通ったものになってきます。つまり、知らず知らずのうちに、発想が形式化しているのです。これが「概念」

です。この概念を知らず知らずのうちに子どもに押しつけてしまっていないか振り返ってみる必要があります。まず、その概念が自分のなかにあることを自覚することがスタートです。自分たちが凝り固まってしまっていることに気づかなければ、子どもに押しつけてしまっていることに気づくことができないからです。そして、例に挙げたリンゴの絵のように、自分のなかに染みついている「概念」を知っておくことで、子どもに押しつけてはいけないことが見えてくると思います。

「リンゴの絵を描きましょう」と投げかけたときに、大きな紙一面を黄色で塗りつぶした子どもの事例を紹介します。この子は、「ぼく赤いやや、黄色がいい」と言って、鼻歌を歌いながら、とても楽しそうに黄色で紙一面を三回塗りました。塗り終わってから、「ぼくは赤いリンゴ嫌いやねん。でも、ママはむいてくれんねん。ママがむいてくれた黄色いリンゴは好き。」とニコニコして言いました。描いていたときのこの子の気持ちを想像してみてください。「ママ、いつもありがとう。ママ大好きママ大好き・・・」と心のなかで考えていたに違いありません。もし、保育者が「今日はリンゴだから赤」と言って、黄色で塗ることを否定してしまっていたら、この子の「ママ大好き」という気持ちは表出してこなかったでしょう。こんな大切な瞬間に保育士さんたちは日々向き合っているのです。私たちが本当の子どもをわかっているならば、子どもを信じて待つことができます。逆に、子どもをわかっているならば、子どもの大事な表現をつぶしてしまうことになることを忘れてはいけません。

## ○概念くずし

子どもは、家庭のなかでおとなの「概念」に影響をうけて育っています。そこで、保育を通じて、家庭でつくられた子どもの概念をくずす環境や仕かけをつくっていくことが大切になります。昔は家庭の役割だった「しつけ」が、今は保育のなかでも求められるようになってきました。そのため、子どもの心を解きほぐす場であった保育のなかで、子どもの心を束縛するような「概念」の押しつけが起きてしまっています。今一度、子どもの心を解きほぐし、心を開かせる保育をすすめていく必要があります。そのためには、保育者も子どもとともに学び、自分のもつ「概念」に気づき柔軟に変化していかないとはいけません。子どもとともに学ぶためには、保育者と子どもには「ずれ」が起こりやすいことを自覚しておくことが重要です。

ある保育所の1歳児の事例を紹介します。この子は、保育所で絵を描いてくれない子でした。



私が視察に行き様子を見てみると、クラスで桜の花を描くことになりました。しかし、前もって先生が桜の花の形を切ってあったんです。先生は「この上に絵を描きます。何を描いてもいいですよ」と言うのですが、形を先生が規定している時点で、子どもを信用していないですね。思うところはいろいろありましたが、とりあえずその子と二人きりでかかわることにしました。どうしようかと悩みましたが、その子は、車が大好きだったので、「車は好き?」「うん」といっ

た会話をしました。その後、「ぶーぶーあげるね。」と言ってクレヨンを渡してみると、その子は「えっ、これぶーぶーなの？」と言って、大喜びしたんです。しばらくすると、その子は桜の花としてあてがわれた紙に絵を描きました。しかも、1歳とは思えない描きぶりで、能力の高さを感じました。その後もどんどん描いていき、最後は紙を車に見立てて遊んでいました。結局、この日だけで7枚の絵を描くことができました。そもそも、周りの子どもたちをみても、先生の描いてほしいように桜の絵を描いているのは、ほんの一部の子どもたちだけでした。このことから、この活動の目標設定が、「できる子」を基準に考えられていたことがわかります。一つひとつの活動は、その活動を苦手としている子に視点を当てて設定し、その子を中心に周りを見ていくことが大切です。子どもが描けないのは子どもが悪いわけではありません。保育者が、子どもが自ら育とうとする力を信用し、意識を変えていくことが重要なのです。



## 《子どもが表現できるように確認しておきたいこと》

自発的に体験したことの積み重ねによって、子どもたちは自分らしさを形成し、自尊感情を高めていきます。そのために、おとなの価値観を子どもに教えるのではなく、遊びのなかで子どもが自ら育とうとする力を信じ、子どもが自然発生的に表現活動を行うことができるような保育にしたいものです。具体的なポイントを数点あげてみたいと思います。

### ◆様々な色や形との、その瞬間の出会いから

見本をみせてしまうと、子どもは先生が大好きだから真似をします。そして、その見本が概念として刷りこまれてしまいます。見本をみせることより、子どもたち一人ひとりが様々な色や形と出会った瞬間の、自然な表現を大切にしましょう。

### ◆他者に向けた「思い」、自分と向き合う「思い」

技法は子どもの発想をくすぐるものとしてとらえ、技能を育てていきましょう。また、絵は子どもの何を育てているのかを問い直してみましょう。園・所で相談してみるのも良いかもしれません。それだけで、研修になると思います。

### ◆造形活動を通して子どもの自尊感情を育てる留意点

おとなの価値を子どもに教えるといった観点で造形活動をすすめるのではなく、子どもが自然発生的に表現活動が行うことができる環境をつくりましょう。子どもたちが、遊びのなかで自らの造形活動を広げていけるように、子どもが自ら育とうとする力を信じましょう。

### ◆指導の効果を焦らない

どうやって絵を描かせるか？どうすればみんながつくれるか？といった方法だけを追うのではなく、目の前の子どもの実態を見つめながら、柔軟な思考で子どもにかかわりましょう。子どもの発見や気づきを保育の中心に据えることで、子どもたちが、自ら工夫し考え出

したものが形や跡になります。そのために、自由で個別な活動時間を保育のなかで意図的に行えるように、子どもたちが自由に選択して遊ぶことができるような環境づくりが必要です。選択できず縛られるだけだと、子どもたちは指示を待つようになります。それが保育を通じてやりたいことではないはずで

### ◆子どもの生活から絵へ

子どもによって、描きたいテーマが異なるのは当たり前です。「みんなで同じ絵を描く」をめざすではありません。「共通なのはテーマではなく画材」と考えるとよいでしょう。テーマを決めて描かせるのではなく、子どもと話し合いながら描きたいことを子どもが決めていくことが大切です。子どもたちは、テーマというより、心に残った「トピックス」を絵に表すものです。

### ◆子どもの内面に耳を傾けるということ

表現活動は、子どもの内面の表出です。そのため、保育者は子どもから学ぶつもりで接するようすることが大切です。保育者は「子どもたちをどうみているか」と常に自分自身をみつめ、変えていくことが要求されています。子どものところに、そして自分自身に耳を傾け続けることが、人権保育の要と言えます。



## 参加者のアンケートより



- ★今までの子どもたちが描く絵を見る気もちが180度かわったと思います。もっと自由でいいんだ。子どもをまるごと認めてあげていいんだと思った。保育を、子どもの発想をみつめていくことをもっと楽しみたいと思いました。
- ★子どものそのままを受けとめること、人権保育・教育の基本だとあらためて思いました。いかに目の前の子どもを信じられているか、信頼関係ができているか。今の自分を見つめなおし、明日からの保育に活かしていきたいです。とても勉強になりました。
- ★表現の講座を初めて受けさせていただきました。製作で見本を作らないことを大切に、子どもを受けとめて保育していきたいと思います。また、概念を持っていることがわかったので、自由な発想を大切にしたいです。
- ★私は保育士10年目ですが、今回の講座を受けてドキッとする話がいくつもありません。絵画や製作でも、みんなに見本を見せて作ったり、顔の絵を描くときでも顔の形、目の形などを描きながらみんなに見せて説明していたなと思いました。子どもたちが子どもたちらしく、思うままに絵を描いたりできる環境づくりをしていくことは、子どもたちがこれ

